

発達 5-PB3

子どものなぞなぞ理解の発達

—はじめは4本、次には2本、最後は3本、それはなに?—

徳井千里

(お茶の水女子大学人間文化研究科)

問いかねて答えは、相互的なコミュニケーションを形成する基本要素である。「なぞなぞ」は、その問いかねて答えのやりとりそのものを楽しむために様式化された言語的相互作用といえる。なぞなぞはまた、正解を競うばかりではなく踏韻や擬人化などの比喩表現をも楽しむことば遊びである。答えにも単なる意味的な正しさだけではなく、意外性や語呂あわせ等が要求される。出題もターゲットの必要十分な特性を記述するのではなく、「はじめは4本、次には2本、最後は3本、それはなに?」というような修辞的な文章構造と機知を備えてこそ、本来のなぞなぞといえる。

それではこうしたなぞなぞ独特の構文や暗黙のルールを、子どもはいつ頃から獲得していくのだろうか。本研究では、子どもがなぞなぞを理解するまでの過程を明らかにするために、就学前児を対象に、なぞなぞや指示物を特定する質問文への回答の成否を調べる。また同じ子どもたちに自由に出題させ、なぞなぞ作成の可否を検討する。

[方法]

= 対象 = 4才児(平均年齢4;6)、5才児(5;5)、6才児(6;5)各20名。それぞれ保育園の年少、年中、年長クラスに在籍していた。

= 項目 = なぞなぞの理解課題として、水準の異なる4レベルの問題を3項目ずつ準備。レベル1は3文節以内の指示物同定質問(例:足にはくものは?)、レベル2は5-7文節の指示物同定質問(例:夜になると空に光るものは?)、レベル3は擬人化表現を含むなぞなぞ(例:赤くて手紙をたべちゃうものは?)、レベル4は踏韻による答えが期待されるなぞなぞ(例:とりはとりでもとべないとりは?)。

= 手続き = 個別の面接により、最初に語彙テスト(PPVT)を実施。続いてレベル1から順に理解課題の問題を出題する。正答には「当たり」誤答には「なるほど」と応答し、回答がなかった場合は正解を教えて次に進む。12問終了後、「今度は**ちゃんがなぞなぞを出してね」「さつきやったみたいに、なんとかなのはなあんだ、ていうの知ってたら教えて」と、子どもになぞなぞの出題を促した。

[結果と考察]

理解課題では正答に2点、不完全回答に1点、誤答および無反応に対して0点を与え、各レベルの得点について年齢群(3) × レベル(4)の分散分析を行った(図1)。その結果、年齢群の主効果($p < .01$)とレベルの主効果($p < .01$)が有意だった。レベルが進んだ比喩表現や踏韻を含んだなぞなぞでは正答が少なく、正答の中でも「とべないとりは?」に対して「ペンギン」と意味的に答えるものが多く、「ちりとり」のような語呂あわせを使った回答はみられなかった。また全レベルの得点の合計とPPVTの評価点は有意に相関していた($r=0.714$)。

出題課題では、意味的・文法的に適切な問題を出題できたものを成功、部分的に不適切な出題を不完全、無反応や質問文として成立しないものを失敗と分類したところ(図2)、有意な偏りがみられた($p < .05$)。6才群になると不完全なものも含めて「ぼうはぼうでも起きるのが遅いぼうは?」というような、韻を踏んだ出題がみられる。

就学前児では加齢や言語機能の発達に伴ってなぞなぞの理解や作成が進んだ。回答の際に優先的に韻を利用することはまだ難しいようだが、年長児の出題では韻が踏まれている場合もあり、やりとりのなかで使用を試みながら、なぞなぞ特有の修辞表現の獲得が進んでいく可能性が示唆された。

